

出産後早期からの定時人工授精の活用で 繁殖成績を向上

【背景・目的・成果】

酪農の経営安定のためには、乳牛が妊娠と出産を安定して繰り返すことが重要です。この試験では、妊娠治療の一つである「定時人工授精法」を、出産後80日頃から実施することで、スムーズに次の妊娠をさせることができました。

41頭の乳牛に対して出産後の74-80日目の早い時期に定時人工授精を実施しました。その結果、県内の平均成績と比べて、出産後、最初の授精を行うまでの日数が約20日短くなり、受胎率も約20%向上しました。

※受胎率とは人工授精を行った牛の中で、実際に妊娠した牛の割合です。

定時人工授精法（オブシンクシダー法）

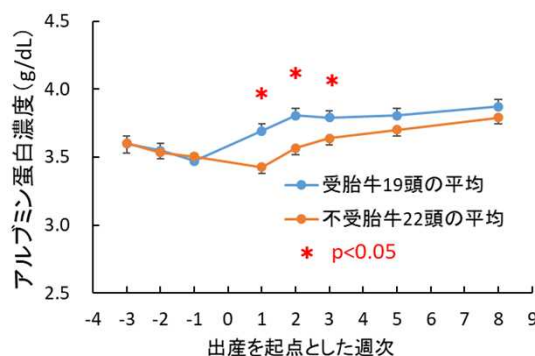
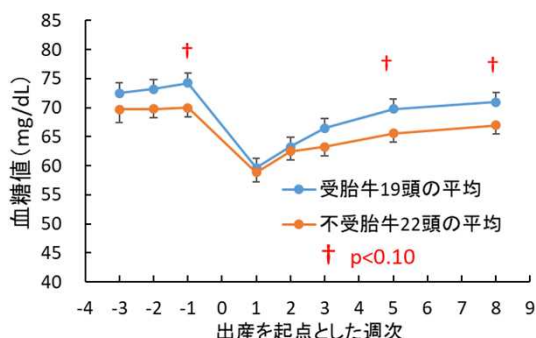
※複数のホルモン剤を組み合わせる事で人工授精の日時に合わせて高確率で発情・排卵を誘起させる手法



早期定時人工授精試験の繁殖成績

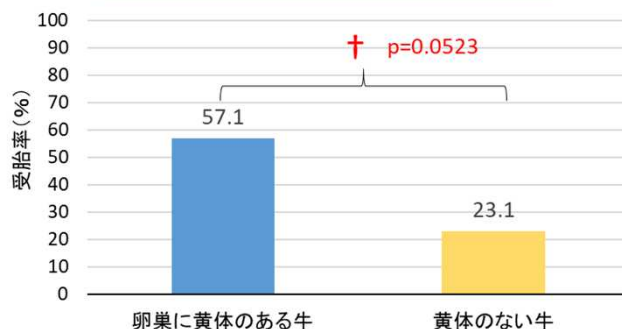
	県下平均成績 (2015年)	試験牛成績 (41頭)
初回人工授精 日数（日）	96.9日	77.6日
受胎率（%）	27.8%	46.3%

妊娠した牛19頭と妊娠しなかった牛の栄養状態を調べたところ、血糖値やアルブミン蛋白濃度など、栄養状態を反映する血液成分は妊娠した牛の方が高く推移していました。定時人工授精技術で妊娠する牛の割合を高くするには、出産前後の栄養状態を良い状態に保つことが重要であると分かりました。



卵巣にしっかりとした黄体がある牛に対して定時人工授精の処置を開始することで、より高い確率で乳牛を妊娠させることができることが分かりました。

処置開始日の黄体の有無と受胎率との関係



【技術の活用】この技術の有効性を酪農家にお知らせし、技術を普及することで県下の酪農家の繁殖成績の向上につなげます。

